

「学びの基礎力」の自己評価の現状

ベネッセ教育総研 小林 洋

はじめに

本調査では、学力をいわゆる従来の教科学力のみで捉えるのではなく、「生きる力」やそれらのベースとなる「学びの基礎力」の3つの観点から総合的に捉え、3つの力が相互に関連し合っ、より強固な学力を形成するという仮説に基づいていることはすでに第1章で述べられている通りである。

本節では、「学びの基礎力」の調査結果の概要と特徴を報告し、「学びの基礎力」をめぐる現状を確認するとともに、次章以降で「学びの基礎力」と「教科学力」との関係、あるいは「学びの基礎力」を育む家庭や学校での教育活動を考えていく際の前提となるデータ・材料を提供するものである。

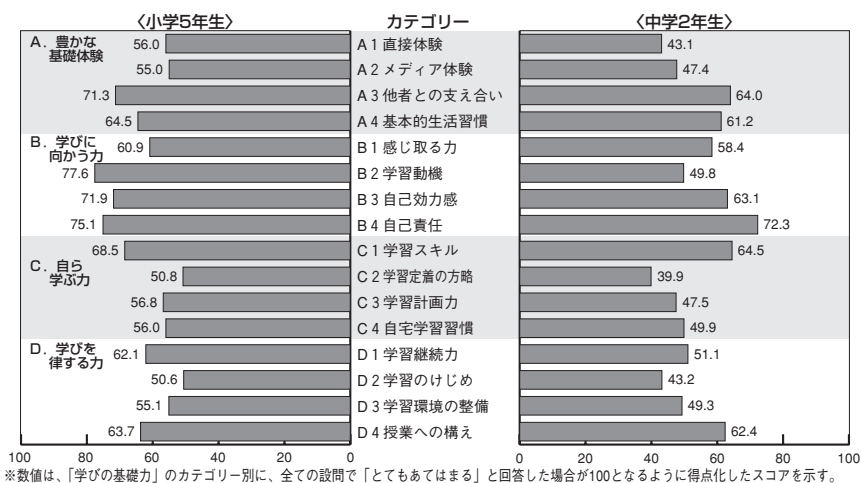
1 「学びの基礎力」の4領域の回答結果

今回の「学びの基礎力」の項目を設定するにあたっては、「A. 豊かな基礎体験」「B. 学びに向かう力」「C. 自ら学ぶ力」「D. 学びを律する力」の4つの領域に大きく分類し、さらに各領域を4つのカテゴリーに分け、計50の詳細項目を設定している（図表2-1-1：「学びの基礎力」の構造モデル参照）。

図表2-3-1は、「学びの基礎力」の小学5年生と中学2年生による自己評価の結果を各カテゴリーに該当する設問の回答をもとに、すべ

ての設問で「とてもあてはまる」と回答した場合が100、逆の場合が0となるようにカテゴリー別に得点化してグラフに示したものである。また、図表2-3-2は、「学びの基礎力」の小学5年生と中学2年生による自己評価の結果を領域別、カテゴリー別に整理して設問ごとの回答結果を具体的に示したものである。（なお、今回の調査報告書で用いている「学びの基礎力」の領域やカテゴリーの用語については、十分こなれていないものも残している。今後の吟味を

■図表2-3-1 「学びの基礎力」の自己評価のカテゴリー別スコア



■ 図表 2-3-2 「学びの基礎力」の児童・生徒による自己評価の回答結果

回答件数：小学 5 年生 1,705 件 中学 2 年生 2,002 件

■ 1 とてもあてはまる ■ 2 まああてはまる □ 3 あまりあてはまらない □ 4 まったくあてはまらない () …その他(その他には無回答が含まれています)

		小 5 (%)					中 2 (%)							
		100	80	60	40	20	0	0	20	40	60	80	100	
A 「豊かな基礎体験」に関する質問	1 直接体験	自然体験	0.1	24.6	47.5	24.4	問 1①	自然の中で遊んだり、活動したりする。	14.5	37.5	37.8	10.1	0.0	
		生活体験	0.1	7.3	18.5	35.7	38.4	問 1④	家で決まった自分の仕事（そうじ、犬の散歩など）をする。	29.3	35.0	25.0	10.7	0.0
		文化体験	0.1	26.9	47.7	20.5	問 1②	美術館や博物館に行く。	9.3	33.9	55.4	0.0	0.0	
		文化体験	0.1	36.4	36.9	18.5	8.1	問 1⑩	演劇・音楽・バレエなどの舞台を実際に見る。	1.4	12.3	24.8	57.3	0.0
		対人体験	0.1	6.0	21.5	36.9	35.5	問 1⑤	先生や家族以外の大人と話をする。	5.6	23.0	35.4	30.2	11.4
		対人体験	0.1	7.0	16.8	35.9	40.2	問 1⑥	弟妹以外の年下の子どもと話したり、いっしょに遊んだりする。	17.5	31.6	28.5	22.4	0.0
	2 メディア体験	新聞との接触	0.1	14.8	31.8	36.9	16.3	問 1⑦	新聞のニュース記事を読む。	15.0	35.2	32.1	17.7	0.0
		インターネットへの接触	0.2	19.1	22.5	27.3	31.0	問 1⑧	インターネットを使って何かを調べる。	34.9	27.0	19.6	18.0	0.7
		手紙	0.1	17.7	34.0	25.5	22.8	問 1⑨	友だちや知り合いに手紙やはがきを書く。	23.4	19.7	24.7	32.3	0.0
		読書	0.1	39.6	21.1	34.3	問 2	この 1 ヶ月間に読んだ本の数（※注 1）	9.7	10.7	59.2	20.3	0.0	
		友だちとの支え合い	0.1	12.4	42.6	42.8	問 3①	自分の考えや気持ちを理解してくれる友だちがいる。	36.8	48.4	11.8	0.0		
		家族との支え合い	0.1	7.7	36.6	53.4	問 3②	家族は自分のことを気にかけてくれていると思う。	38.0	46.6	11.9	0.0		
		家族との支え合い	0.1	18.8	32.2	43.5	問 3③	学校のでできごとなどを自分から家族に話す。	29.1	34.1	25.9	11.0	0.0	
		教師への信頼	0.2	6.5	26.6	49.9	16.9	問 3④	学校の先生は、自分のことをみてくれていると思う。	8.0	43.8	36.7	11.4	0.0
		3 他者との支え合い	食習慣	0.1	6.0	13.1	78.8	問 3⑥	朝食は毎日食べるようにしている。	77.0	12.4	7.3	0.0	
			自律的行動	0.1	11.7	24.2	34.5	29.5	問 3⑦	朝、自分で起きることができる。	33.1	31.6	24.3	11.0
生活リズム	0.2		16.0	25.2	33.5	25.1	問 3⑮	夜おそくまで、だらだらと起きることがある。	35.1	36.8	20.2	7.9	0.0	
知的好奇心	0.1		7.2	28.5	37.4	26.9	問 3⑧	ふだんから「ふしぎだな」「なぜだろう」と感じることが多い。	26.2	37.5	30.3	6.1	0.0	
B 「学びに向かう力」に関する質問	1 感じ取る力	感性の豊かさ	0.1	13.3	24.8	35.5	26.5	問 3⑨	本やドラマなどを見て、人の生き方に感動することがある。	36.5	33.5	21.4	8.5	0.0
		学ぶ楽しさ	0.1	6.8	21.0	46.6	25.5	問 6①	勉強していて、おもしろい、楽しいと思うことがある。	11.0	36.4	38.0	14.5	0.0
		学習の役立ち感	0.1	12.4	33.7	50.4	問 6③	勉強して身につけた知識は、いずれ仕事や生活の中で役に立つと思う。	21.8	33.9	30.5	13.8	0.0	
		学習活動の充実感	0.1	11.1	30.7	55.5	問 6④	勉強して何かがわかるようになっていくことはうれしい。	48.8	33.5	13.4	0.0		
		学力向上心	0.1	12.9	33.4	50.4	問 6⑤	勉強をして、もっと力や自信をつけたいと思う。	44.2	37.1	13.9	0.0		
		自己肯定感	0.1	15.0	45.8	36.1	問 3⑩	自分は、やればできると思う。	28.3	45.9	20.7	0.0		
	2 学習動機	自己有能感	0.1	9.7	25.3	32.3	32.6	問 3⑭	友だちからみとめられるような得意なことがある。（※注 2）	32.4	49.3	13.4	0.1	
		達成経験	0.1	9.3	29.3	59.2	問 3⑰	ものごとをやりとげた時のよこびを味わったことがある。	55.5	33.2	9.1	0.0		
		自助努力	0.1	9.2	28.9	59.4	問 6⑦	努力をして、苦手な教科も得意になるようにしたい。	54.6	31.1	9.9	0.0		
		自助努力	0.1	8.5	29.3	59.6	問 6⑧	成績が悪かったときは、自分の努力が足りなかったからだと思う。	65.9	24.9	6.3	0.0		
		自己強化力	0.1	10.9	18.0	35.4	35.6	問 6⑨	がんばって勉強したときは、自分をほめたい気持ちになる。	35.3	33.2	21.6	9.9	0.0
		失敗を活かす力	0.1	14.3	44.2	38.4	問 6②	勉強で同じまちがいをくり返さないように気をつけている。	21.3	46.5	26.8	0.0		

「学力向上のための基本調査」の設計と結果概要

(図表 2-3-2 つづき)

■ 1とも ■ 2まあ ■ 3あまり □ 4まったく ()…その他(その他には無回答が含まれています)

		小 5 (%)					中 2 (%)							
		100	80	60	40	20	0	0	20	40	60	80	100	
C 「自ら学ぶ力」に関する質問	1 学習スキル	ノートの取り方	0.2	10.7	38.8	47.7			71.0	23.4			0.0	
		ノートの取り方	0.2	7.0	28.4	40.0	24.4			27.4	38.0	28.0	6.6	0.0
		学び方の工夫	0.4	15.9	44.6	35.2				22.9	39.5	28.6	8.9	0.0
		テストへの対応	0.2	7.9	20.0	34.4	37.5			16.2	32.9	33.6	17.3	0.0
	2 学習定着の方略	反復方略	0.2	11.8	41.2	35.5	11.3			23.8	51.4	19.1		0.0
		精緻化方略	0.3	13.8	35.5	31.1	19.4			9.4	27.8	40.5	22.2	0.1
		体制化方略	0.2	12.4	34.9	36.0	16.5			11.6	31.3	41.0	16.0	0.0
		体制化方略	0.3	11.0	37.0	38.5	13.2			18.7	46.8	29.0		0.1
	3 学習計画力	学習状況の評価	0.1	7.5	26.6	45.2	20.6			16.5	42.2	33.8	7.5	0.0
		学習目標・課題の認識	0.2	21.1	40.5	33.5				25.7	33.9	30.0	10.4	0.0
		学習計画の立案	0.2	20.6	39.6	27.5	12.2			14.3	42.9	38.3		0.1
		宿題の習慣	0.2	9.9	28.1	59.7				34.7	37.9	21.3	6.0	0.0
4 自宅学習習慣	復習の習慣	0.2	23.8	45.1	23.1	7.7			12.3	45.9	38.7		0.1	
	自主的な学習	0.2	10.7	26.9	36.2	26.0			17.2	31.8	33.0	18.0	0.0	
	自主的な学習	0.4	8.8	24.3	36.8	29.7			21.7	33.6	30.9	13.8	0.0	
	学習時間	0.7	7.3	47.0	22.9	22.1			24.8	29.0	34.2	12.0	0.0	
D 「学びを律する力」に関する質問	1 学習継続力	積み上げる力	0.2	27.1	49.0	19.5			9.8	38.2	43.0	8.9	0.0	
		克己心	0.2	26.1	48.7	20.8			11.8	41.7	37.6	8.7	0.0	
		遂行力	0.2	25.0	44.2	26.1			13.3	36.2	41.7	8.8	0.0	
		意識の切り替え	0.1	19.6	41.5	34.4			19.0	35.0	35.1	10.8	0.0	
	2 学習のけじめ	集中力	0.3	10.4	36.6	40.6	12.1			7.9	29.6	43.9	18.6	0.0
		注意力	0.3	10.2	34.8	38.1	16.6			17.5	41.1	31.1	10.3	0.0
		注意力	0.2	24.1	45.1	24.7				32.3	44.9	18.7		0.0
		学習時の姿勢	0.2	16.2	37.7	33.9	12.0			9.3	23.2	41.1	26.4	0.0
	3 学習環境の整備	身の周りの整理	0.4	25.5	22.4	24.2	27.6			34.2	26.6	16.4	22.8	0.0
		学習への準備	0.4	17.9	34.2	41.6				35.3	36.5	21.9	6.2	0.1
		授業への準備	0.4	15.2	35.0	45.6				45.9	32.8	15.9		0.1
		積極的な参画	0.5	26.4	51.6	16.4				16.8	48.1	28.8		0.1
4 授業への構え	聞き話す構え	0.1	20.5	56.7	20.4				18.2	53.6	25.3		0.0	
	聞き話す構え	0.1	31.4	50.7	12.8				14.4	43.9	36.3	5.3	0.0	
	問 8① 黒板に書かれたことは、きちんとノートに書いている。													
	問 8② 絵や図などを使って、わかりやすくノートをまとめている。													
問 8③ 友だちや先生から聞いた勉強のやり方を参考にしている。														
問 8⑥ テストでまちがえた問題は、やり直している。														
問 8④ 新しく習ったことは、何度もくり返し練習している。														
問 8⑩ 授業で習ったことを、自分なりにわかりやすくまとめている。														
問 8⑪ 授業で習ったことはそのまま覚えるのではなく、その理由や考え方もいっしょに理解している。														
問 8⑤ 授業で習ったことをふだんの生活と結びつけて考えている。														
問 6⑩ それぞれの教科の内容を自分がどれくらい理解できているかわかっている。														
問 6⑥ 今の自分にとって、どんな勉強をしなければならぬかを、よくわかっている。														
問 7⑥ ふだんから計画を立てて勉強している。														
問 8⑦ 宿題はきちんとやっている。														
問 8⑨ 授業で習ったことは、その日のうちに復習している。														
問 8⑧ 家族に言われなくても、自分から進んで勉強している。														
問 8⑫ 興味を持ったことは、自分で進んで調べたり勉強したりしている。														
問 9① 学校の授業以外に1日にどれくらい勉強するか(月から金)(※注3)														
問 9② 学校の授業以外に1日にどれくらい勉強するか(土・日・休み)(※注3)														
問 7① 何ごとに対しても、こつこつ努力している。														
問 7② 自分のなまけ心には負けないようにしている。														
問 7③ わからないことはそのままにせず、わかるまでがんばっている。														
問 7④ 勉強するときにはしっかり勉強し、遊ぶときはしっかり遊んでいる。														
問 7⑤ 勉強するときには、他のことに気を取られないで集中している。														
問 7⑧ 授業中ぼうっとして、大事な事を聞きのがしてしまうことがある。														
問 7⑨ 見直しをしないで、うっかりまちがえてしまうことがある。														
問 7⑦ 正しい姿勢で机に向かって勉強している。														
問 7⑩ テレビをつけたり、音楽をかけたまま勉強している。														
問 7⑪ 必要なものをきちんとそろえてから勉強を始めている。														
問 7⑫ ふだんから遅刻や忘れ物をしないようにしている。														
問 7⑬ 授業を熱心に受けている。														
問 3⑫ 人の話は、最後まできちんと聞いている。														
問 3⑬ 相手の目を見て、はっきりと話している。														

注1) 1…6冊以上、2…4～5冊、3…1～3冊、4…0冊 注2) 中2の設問は、「自分の意見や行動は、周りの人に良い影響を与えていると思う。」
注3) 1…2時間30分以上、2…1時間30分～2時間、3…30分～1時間、4…ほとんどしない

通して、用語としても正確を期していきたいと考えている。）

以下に、各領域別に回答結果の特徴を見ていく。

(1) 「A. 豊かな基礎体験」に関する回答結果

この領域には、図表 2-3-1 にある通り「A1. 直接体験」「A2. メディア体験」「A3. 他者との支え合い」「A4. 基本的生活習慣」という 4 つのカテゴリーを設けている。このレベルで見た場合、自己評価が最も高いのは小 5 生、中 2 生ともに「他者との支え合い」である。「他者との支え合い」は、家族との良好な関係や、学校での友人との相互に理解し合える関係、および、教師から認められていると思うことのできる関係を表すものであり、言わば、子どもにとって最も身近なコミュニティ（= 子どもの直接的な生活基盤）の人間関係の良好性の度合いを示すものと言える。この部分が全体として高いことは望ましいことである。しかし、全体として、自己評価が相対的に高いとはいえ、「とてもあてはまる」というトップボックスについてみると、小 5 生では 4 割から 5 割、中 2 生では 3 割から 4 割程度がそれに該当するにすぎず、「教師から認められている」という項目にいたっては、「とてもあてはまる」と回答している割合は、小 5 生で 17%、中 2 生では、わずか 8% にすぎない。したがって、この「他者との支え合い」においても、さらに良好な自己評価となるような取り組みや働きかけが学校と家庭双方において求められている。

カテゴリーのレベルで見て「他者との支え合い」に次いで自己評価が高いのは、小 5 生、中 2 生ともに、「基本的生活習慣」となっている。このカテゴリーには、「朝食は毎日食べるようにしている」という食習慣（家庭における子どもの成育環境）に関わる項目、「朝、自分で起きることができる」という自律的行動に関わる項目、および「夜おそくまで、だらだらと起きている

ことがある」という生活リズムに関わる項目の 3 つを含んでいる。「朝食は毎日食べるようにしている」という項目は、第 3 章で見ると、とりわけ、「教科学力」とも相関の高いものの一つである。この項目については、小 5 生、中 2 生ともに 80% 近くが「とてもあてはまる」と回答しており、「まったくあてはまらない」という回答は、小 5 生では 2% 台、中 2 生では 3% 台と多くはないものの、20% 近く、すなわち 5 人に 1 人がはつきりとは肯定できない状況に置かれていることに注意を向けたい。「基本的生活習慣」の確立は、知育面のみならず、とくに低学年の子どもにとっては体育面にも影響の大きい課題であるだけに、保護者と学校との連携の大切なテーマであることを改めて指摘しておきたい。

カテゴリーのレベルで見て、自己評価が最も低いのは、中 2 生では「直接体験」となっており、小 5 生でも、最も低い「メディア体験」とほぼ並ぶ結果となっている。

「直接体験」の中で、自己評価が最も低いのは、小 5 生、中 2 生ともに文化体験としている「美術館や博物館に行く」という項目であり、次いで低いのが同様に「演劇・音楽・バレエなどの舞台を実際に見る」という項目である。これらは、家庭の文化的指向にむろん左右されるものであるが、それ以前に、地域の文化施設の整備状況に大きく制約されるものであることは言うまでもない。言わば、これらの文化的体験の肯定度合いは、「地域の教育力」の指標の一つと言えるものである。第 3 章で見ると、これらの文化的体験の有無はやはり教科の学力と関係がある。すでに多くの地域で取り組まれているように、文化的体験ができる環境の整備という課題は、学校と家庭の連携のみならず、地域行政サイドの課題のありかや三者の連携の領域の一つを示していると言えよう。（なお、「直接体験」のうち、「自然体験」については「とても」「まあ」あてはまると回答した割合は、小 5 生

で72%、中2生で52%程度となっているが、これは今回の設問が主として現在の状況をイメージして回答するものになっているため、過去からの体験の累積度合いを問う設問であったならば、おそらくもっと高い数値になっていたと考えられる。

「メディア体験」は、小5生では最も自己評価が低く、中2生でも「直接体験」に次いで自己評価の低い結果となっている。「メディア体験」とした中には、「新聞のニュース記事を読む」や「インターネットを使って何かを調べる」といった設問の外に、手紙を書く習慣や読書の習慣を含んでいる。新聞よりも新しいメディアであるインターネットの接触体験のほうが高い肯定率となっているのは、今日の時代の特徴を表していると言えよう。「メディア体験」の内、読書の習慣については、本を「1ヶ月に6冊以上」読むという割合は、小5生34%に対して、中2生は10%と低い。「1ヶ月に4～5冊」との合計でみると、小5生55%、中2生20%となっている。近年、「朝読書」「読書タイム」といった読書習慣を育てる取り組みが全国的に広がりを見せており、「朝の読書推進協議会」の全国的な調査によると、「朝読書」を実施している割合は、小学校41%、中学校36%となっている（2003年10月3日時点での集計数値）。この数字を見る限り、中学校でも小学校とほぼ同じように読書活動に取り組みられている様子がうかがわれるが、中2生は小5生に比べて本に向かいにくいようである。

以上、「豊かな基礎体験」の回答結果を概観した。「基礎体験」を「学びの基礎力」の一つの領域に位置づけているのは、第2章の図表2-1-1に示す通り、「基礎体験」が他の「学びの基礎力」の土台であり、教科の学力や「生きる力」が育つベースとなっているという基本仮説に基づくものである。豊富な自然体験は自然認識＝自然の法則的理解の土台であり、豊富な対人体験や社会体験は、人間と社会に関する認識

の土台となり、ひいては自己認識の土台となるものであろう。

今回の調査で設定した「基礎体験」の項目の中には、自然体験のような素朴でより遊びに近い体験から、「新聞」や「読書」のような、どちらかと言えば学習活動の意味合いが強いものも含んでいる。「体験」自体を構造付けるとすれば、よりベースに置くべきは、幼い子どもが経験するような直接的な自然体験や、家族や近所の大人や子どもたちと触れ合い交流する体験であり、メディア体験や、直接体験の中でも文化的体験は、その上に位置づけられることになるであろう。幼い子どもは、より直接的な体験を通して、感性を育て、また自然や社会に対する夢や憧れを育むのである。高学年になるにつれて、「体験」は、その意味を明確にして目的意識的になされる学習活動の比重が高まっていくことになる。

(2) 「B. 学びに向かう力」に関する回答結果

この領域は、学びへの意欲の強さ、学びへの原動力を表すものである。この領域には、「B1. 感じ取る力」「B2. 学習動機」「B3. 自己効力感」「B4. 自己責任」の4つのカテゴリーを含んでいる。図表2-3-1に見る通り、カテゴリーのレベルで見た場合、最も自己評価が高いのは、小5生では「学習動機」、中2生では、「自己責任」の部分であり、反対に自己評価が最も低いのは、小5生では「感じ取る力」、中2生では「学習動機」となっている。

「学習動機」は、「学習の役立ち感」や「学習活動の充実感」および「学力向上心」からなるカテゴリーであるが、小5生ではいずれも「とてもあてはまる」のトップボックスが5割を超え、「ややあてはまる」と合わせて80%以上の肯定率となっているのに対して、中2生では、「学習活動の充実感」と「学力向上心」については小5生と比べてやや低いという程度に止まっているものの、「勉強して身に付けた知識は、いずれ仕事や生活の中で役に立つと思う」という

「学習の役立ち感」については、「とてもあてはまる」と答えた割合は小5生の50%から中2生22%と30ポイント近くも低い数値となっている。すなわち、中2生の中には、「勉強して、もっと力や自信をつけたい」と思っている一方で、勉強しても生活に役に立たないと感じている生徒が少なくないのである。昨今、子どもの学習離れの問題が叫ばれているが、中2生については、この「学習の役立ち感」の低さが、その背景要因の一つとなっていると考えられる。

また、小5生では「学習動機」の各項目についてトップボックスの数値がいずれも5割を超えていると述べたが、「勉強して何かがわかるようになっていくことはうれしい」とか「勉強して、もっと力や自信をつけたい」といった項目で「とてもあてはまる」と回答している割合が、5割強程度であることは、満足のいく状態とは決して言えないだろう。

中2生は、「学習動機」は低いが、学習に関わる「自己責任」に関しては、図表2-3-1に見る通り、実は「学びに向かう力」の領域の中のみならず、「学びの基礎力」の4つの領域のすべてのカテゴリの中で、最も高い自己評価を示している。中でも、「成績が悪かったときは、自分の努力が足りなかったからだと思う」という設問では、「とてもあてはまる」と回答している割合が、小5生の場合よりも6ポイント近く高い66%となっている。このように、中2生は、成績変動の原因を自分に帰属させる傾向が小5生と比べて強いことがわかる。しかし、他方、「同じ間違いをくり返さないように気をつけている」という設問では、「とてもあてはまる」という回答が、小5生と比べて17ポイントも低く、成績を左右する原因が自分にあるという認識はあるもののそれが、成績向上のための努力に必ずしもストレートに結びついていない状況を示している。成績を左右する責任が自分にあるという認識は、成績向上に向けた主体的な学習活動に向かうためにも大切な要件であろう。

しかし、このことは、同時に、自分の能力や資質に対して否定的になったとき、すなわち、「自分はやればできる」という「自己肯定感」や「自己有能感」が揺らいだとき、あっさりと勉強から手を引いてしまう傾向も強めてしまう危険も孕んでいるのである。このことは、学習することの意味や、学習することの面白さや楽しさが味わえる授業の工夫など、学習の動機付けの大切さを改めて示唆していると言えよう。

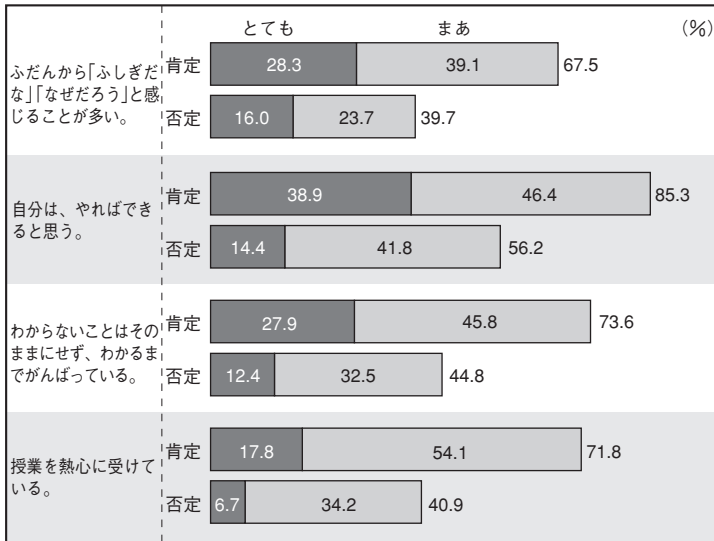
「自己肯定感」や「自己有能感」は、「ものごとをやり遂げた喜びを味わったことがある」という「達成経験」と合わせて、「自己効力感」のカテゴリに含めているものである（「自己有能感」の設問は、小5生と中2生の間で表現が異なることに注意）。「自分はやればできる」という設問に対して、「とてもあてはまる」と回答している割合は、小5生で36%、中2生で28%程度にすぎない。しかし、自分は頑張れば何かやり遂げられる、という自分の可能性＝潜在的な能力に対する信頼を持つことなしに、何かをやり遂げようという意欲は生まれまいだろうし、したがって目標を達成するための自主的な努力は成立し得ないであろう。「自分は、やればできる」という自分への信頼があってこそ、子どもは自ら勉強に向かうのである。「自ら学ぶ子ども」、家庭でも「家族に言われなくても自分から進んで勉強する子ども」とは、少なくとも自分の可能性への信頼感を持っている子どもたちである。反対に、この自分の可能性への信頼感、自己肯定感が育っていない子どもたちに勉強に向かわせるためには、外からの何らかの強制、大人・教師による‘他律’が必要となる。

子どもたちが、「自分は、やればできる」と思っていることに対して、これをやや否定的に捉える向きもないわけではない。「自分は、やればできる」のだから今頑張る必要はないと子どもたちは思っているのではないかと心配する教師の声をうかがったことがある。しかし、これは、「自分は、やればできる」という自己肯定感を子

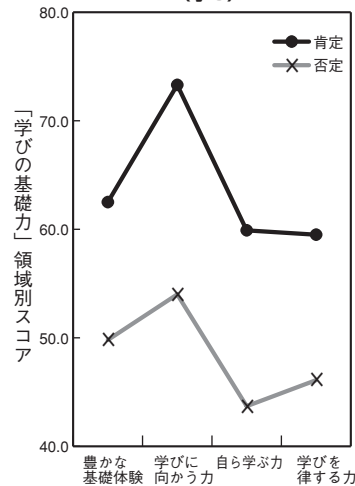
どもが持っていることが問題なのではなく、自分の学習状況を振り返り、求められるレベルからの達成・未達成の具体的な認識を踏まえ、将来の目標に備えて、今何をどれだけ勉強していくことが求められているのかという学習目標・

課題認識をきっちり確立させていくことなど、自己肯定感の存在に依拠した次の動機付けが課題になっていることを示しているのではないだろうか。

■図表 2-3-3 「ものごとをやり遂げた経験」の肯定・否定による他の項目の回答状況の違い〈小5〉



■図表 2-3-4 「ものごとをやり遂げた経験」の肯定・否定による「学びの基礎力」の領域別スコアの違い〈小5〉



「学びの基礎力」領域別スコアは、領域別に全ての設問で「とてもあてはまる」と回答した場合が100となるように得点化したもの。

この「自己肯定感」あるいは自尊感情を子どもたちに育てていく上で、大切なキーワードが「ものごとをやり遂げた喜びを味わったことがある」という「達成経験」(成功体験)であると考えられる。

図表 2-3-3 および図表 2-3-4 は、この「達成経験」の有無による「学びの基礎力」の他の項目の回答の違いを見たものである。「ものごとをやり遂げた」経験をもつ子ども(肯定)は、そうでない子ども(否定)と比べて、「学びの基礎力」のいずれの領域においても高いスコアを示し、自己肯定感や知的的好奇心および学習への姿勢において高い自己評価を示している。ものごとをやり遂げた経験を通して、子どもは「自分もやればできる」という自己肯定感や自尊感情を培い、自ら学習に向かう意欲を高めてい

くと考えられる。上の図表は、小5生についてのものであるが、中2生の場合も、同様な傾向が見られるのである。

この「達成経験」を「とてもあてはまる」と回答する割合は、小5生で59%、中2生で56%となっており、これらの数値に比べて、「自己肯定感」の数値は低くなっている。このことは、ものごとをやり遂げた「達成経験」の積み重ねを通して、「自己肯定感」が育まれるという筋道を反映していると考えられる。「達成経験」の積み重ねを通して、自分は少しくらいの困難に負けない人間であるというプライドを育て、課題達成に向けて粘り強く頑張り通す力(対処性)を育み、これがさらに大きな課題をやり遂げる体験を可能にしていくのである。また、「達成経験」=「自己肯定感」でないのは、「ものご

とをやり遂げた」経験が自動的に「自己肯定感」に結びつくものではなく、反復的・反芻的な自己評価（自己反省的な活動）や他者（教師や友達、家族など）からの評価＝賞賛を通して、初めて自己イメージの肯定的な変革につながるといふ事情を表していると考えられる。

(3) 「C. 自ら学ぶ力」に関する回答結果

この領域には、「C1. 学習スキル」「C2. 学習定着の方略」「C3. 学習計画力」「C4. 自宅学習習慣」の4つのカテゴリーを含んでいる。図表2-3-1に見る通り、カテゴリーのレベルで見た場合、最も自己評価が高いのは、小5生、中2生ともに「学習スキル」に関わる部分であり、反対に最も自己評価が低いのは、これも小5生、中2生ともに「学習定着の方略」の部分である。

「学習定着の方略」には、「新しく習ったことは何度もくり返して練習している」という「反復方略」、「授業で習ったことを、自分なりにわかりやすくまとめている」という「精緻化方略」、「授業で習ったことはそのまま覚えるのではなく、その理由や考え方もいっしょに理解している」「授業で習ったことをふだんの生活と結びつけて考えている」という「体制化方略」を含んでいる。これらの設問について、「とてもあてはまる」とする回答が、小5生では2割弱、中2生では1割程度というレベルに止まっている状況にあることには注意を向けざるを得ない。先述した「学びに向かう力」において、中2生の「学習の役立ち感」の低さを指摘したが、「授業で習ったことをふだんの生活と結びつけて考えている」という設問に「とてもあてはまる」と回答する割合は、中2生ではわずかに5%程度、小5生でも13%に止まっていることは改善を要する課題ではないだろうか。

「学習スキル」については、「黒板に書かれたことは、きちんとノートに書いている」という設問で、「とてもあてはまる」と回答している割合が、小5生48%に対して、中2生は71%、

「まああてはまる」と合わせて94%と非常に高く、小5生と比べて中2生の自己評価が著しく高いことが注目される。しかし、「テストでまちがえた問題は、やり直している」という設問では、「とてもあてはまる」の回答が、小5生38%→中2生16%と半分以下となっており、学習定着の方略の全体的な低調さと合わせて対策が講じられるべき課題であろう。

「学習計画力」と「自宅学習習慣」のカテゴリーは、「自ら学ぶ力」（自己学習力）のより直接的な指標とみなすことができる。「学習計画力」には、「学習状況の評価」「学習目標・課題の認識」および「学習計画の立案」の3つの項目を含んでいる。前者の2つは、学習の自己評価とそれに基づく重点課題の把握・理解する力といういわゆる学習に関わる「メタ認知」の力を表すものであり、3つめの「学習計画の立案」による計画的な学習の遂行の必要条件＝前提と考えられるものである。現在、「指導と評価の一体化」「学習のふり返り活動」といった取り組みに力を入れている学校が多く生まれているが、これらの取り組みが、学習の自己評価を通じた学習課題・目標の自主的な選択と学習活動の自己組織化という側面を有し、この意味で子どもの「自ら学ぶ力」の育成を期したものとすることができるであろう。しかし、「学習計画力」の中の「学習状況の評価」や「学習目標・課題の認識」、および「自宅学習習慣」の中の「自主的な学習」の設問を見ると、「とてもあてはまる」と回答している割合は、小5生で2割から高くても3割強、中2生では、2割弱から高くても2.5割となっており、満足のいく状態とは言えないであろう。結果として、これらを前提として成立すると考えられる「ふだんから計画を立てて勉強している」という「学習計画の立案」についてもトップボックスの数値は、小5生で12%、中2生では4%強のレベルに止まっているのである。

「学習時間」については、中2生ではトップ

ボックスの2時間30分以上勉強しているという子どもの割合が、平日、それ以外ともに、小5生と比べてやや高いが、同時に、「ほとんどしない」という子どもの割合もやや高くなっており、学習時間についても両極化する傾向が見られる。

(4) 「D. 学びを律する力」(自己コントロール力)に関する回答結果

この領域には、「D1. 学習継続力」「D2. 学習のけじめ」「D3. 学習環境の整備」「D4. 授業への構え」の4つのカテゴリーを含んでいる。図表2-3-1に見る通り、カテゴリーのレベルで見た場合、最も自己評価が高いのは、小5生、中2生ともに「授業授業への構え」であり、反対に最も自己評価が低いのは、これも小5生、中2生ともに「学習のけじめ」の部分である。

「授業授業への構え」の自己評価の数値を他と比べて高めているのは、「ふだんから遅刻や忘れ物をしないようにしている」という設問であり、小5生、中2生ともに「とてもあてはまる」の回答が46%程度、「まああてはまる」との計で、80%程度となっている。しかし、「授業を熱心に受けている」という授業への姿勢をより直接的に問う設問では、小5生、中2生ともに「とてもあてはまる」と回答している割合は16%~17%程度にすぎず、「宿題はきちんとやっている」という設問(自宅学習習慣の中の項目)で「とてもあてはまる」と回答している割合(小5生60%、中2生35%)よりもかなり小さくなっていることに注意したい。宿題をきちんとやっていると思っている子どもでも授業を熱心に受けているとは自己評価できない子どもが少なくないのである。これは、前者が「強制」が作用した結果も含んだ割合であるのに対して、後者は、より自主的に学習に向かう子どもの割合を表現していることによる差と考えられる。

「学習のけじめ」の部分では、とりわけ「勉

強するときは集中している」という「集中力」を問う設問で「とてもあてはまる」と回答している割合や、「授業中ぼうっとして大事なことを聞きのがしてしまうことがある(反転項目)」という「注意力」を問う設問で、「まったくあてはまらない」と回答している割合は、小5生、中2生を通して10%~19%程度である。これらは、先に述べた朝食の習慣や生活のリズムといった基本的な生活習慣の問題や、学習意欲の問題、および学習状況の自己評価に基づく課題認識の強さ、また教師の授業を面白く進めるスキルなど、複数の要因が作用して表れる複合的な指標と考えられる。

「学習継続力」も、文字通り学習の成果を長期的に積み上げていく上で欠かせない力であるが、「何ごとにもこつこつ努力している」「自分のなまけ心に負けないようにしている」「わからないことはわかるまでがんばる」といういずれの項目でも、「とてもあてはまる」と回答している割合は、小5生で20%~26%に対して中2生では半分の10%~13%であり、逆にこれらの項目で「まったくあてはまらない」と回答する割合が中2生では小5生に比べて2倍近くになっている。「学習継続力」の各項目のこのような肯定的な数値の低さは、「集中力」や「注意力」とある意味では同様に、いろいろな要因がからんだ複合的な結果として表れている数字と考えられ、それゆえ、対症療法的に済ませられる特效薬があるわけではないであろう。「努力することなんてダサイこと」といった価値観の子どもの間でのひろがりやを問題視する声もあるが、ここでは、「自分もやればできる」という自己肯定感や自尊感情を育てる取り組みが、少なくとも「学習継続力」や計画的・自主的な学習の習慣を身に付けさせていく上で、大切な前提条件の一つであろう、ということを改めて指摘しておくにとどめたい。

(5) 「学びの基礎力」の 4 つの領域全体を俯瞰して

以上、「学びの基礎力」の 4 つの領域それぞれについて、子どもの自己評価の概要を示し、数値が意味することに対しても若干の考察を加えてきた。

「学びの基礎力」の育成が目指すところは、煎じ詰めて言えば、自主的・自律的にかつ計画的に学びを進めていく力であろう。簡単に言えば「自ら学び自ら考える子どもづくり」に他ならない。しかし、先にある程度の考察を加えたように、すべての子どもを一律に「自ら学ぶ」子どもにしていこうすることは不可能であり、子どもの意識や学習行動の発達段階に応じた取り組みが求められているのである。自分の可能

性に全く自信がない子ども、努力しても無駄と思っている子どもに自主的な学習を促してもそれは無理というものである。そのためには、まずは自分の可能性を、「やればできる自分」に気づかせてやる支援が必要なのである。

このように「学びの基礎力」の中にも他を前提として初めて成り立つような関係構造が存在している。詳しい展開は、別の機会に譲るが、「基礎体験」、とくに自然や人間・社会の中での直接的な体験の充実はやはりすべてのベースであろう。ここで、自然や社会で活躍する人への素朴な憧れや夢を育ませ、知的好奇心を育て、そして勉強することの価値を深いところで把握させていくことが、すべての原動力となるのではないだろうか。

2 小 5 生 と 中 2 生 の 比 較

前項でも随所で小 5 生と中 2 生の間での回答結果の違いにふれてきたが、図表 2-3-1 に見る通り、「学びの基礎力」を測る大部分の項目で、中 2 生は小 5 生よりも自己評価が低いのである。これは、実は、「生きる力」の項目についても同様である。「学びの基礎力」の合計 61 の設問の中で、中 2 生のほうが、小 5 生よりも自己評価が高くなっている項目は、トップボックスの数値で見た場合、「豊かな基礎体験」の領域では「インターネットを使って何かを調べる」(小 5 生 31%、中 2 生 35%)、「朝、自分で起きることができる」(小 5 生 30%、中 2 生 33%) などの 3 項目、「学びに向かう力」の領域では、「本やドラマなどを見て、人の生き方に感動することがある」(小 5 生 27%、中 2 生 37%)、「成績が悪かったときは、自分の努力が足りなかったから」(小 5 生 60%、中 2 生 66%) の 2 項目、「自ら学ぶ力」の領域では、「黒板に書かれたことはきちんとノートに書いている」(小 5 生 48%、中 2 生 71%)、「絵や図などを使って、

わかりやすくノートにまとめている」(小 5 生 24%、中 2 生 27%)、「学校の授業以外の 1 日の学習時間」(土・日・休みについて、2 時間 30 分以上：小 5 生 14%、中 2 生 18%、同じく平日について、2 時間 30 分以上：小 5 生 22%、中 2 生 25%) の 4 項目、その他に「学びを律する力」の領域でわずかに高くなっている 3 つの項目を加えても、合計 12 項目にすぎない。61 項目のうち 49 項目で、中 2 生は小 5 生に比べて、自己評価が低いか、よくて同程度の状態にあることになるが、中 2 生のほうが小 5 生よりも自己評価がトップボックスの数値で半分以下となっている項目は、「豊かな基礎体験」の領域で「1 ヶ月間に読んだ本の数」「学校の先生は、自分のことを認めてくれていると思う」などの 4 項目、「学びに向かう力」の領域で「学ぶ楽しさ」「学習の役立ち感」の 2 項目(※小 5 生と中 2 生で設問の表現が異なるものは除いた)、「自ら学ぶ力」の領域で「まちがえた問題は、やり直している」「新しく習ったことは何度もくり返して

いる」「ふだんから計画を立てて勉強している」などの6項目、「学びを律する力」の領域で「なにごとにもこつこつ努力している」の1項目、計13項目となっている。

以上の傾向は、次のような要因が複合的に作用している結果であると考えられる。

- ① 発達段階として、これまで素朴に抱いていた夢や目標と厳しい社会の現実との格差を知り、全体的に自信が揺らいでいる（思春期の特質の一つ）。このことが、自律的な行動の後退をもたらし、学習への積極性の低下傾向にもつながっている。
- ② 中2生の自己評価基準が、小5生と比べて高まっている。すなわち、中2生は小5生と比べてより厳しい‘ものさし’を自分に当てて見ているのかもしれないということである。これは、上の発達段階としての特質

にも関わるが、小5生と比べての学年集団規模の拡大や、教科担任制などによる複数教師との関わりによる人間関係の多様化、対外的活動機会の増加、異性との関わり、社会認識の高まりなど、これらが自分を多様な他者との比較で見ると自己相対化の傾向を強めていることが背景にあると考えられる。

- ③ 「学びの基礎力」の育成につながるような学校や家庭での取り組みの違い。

しかし、より確かな結論を導くには、対象学年の低学年からの継続的な追跡調査などに基づき、研究を深める必要があると考えられる。

学校においては、発達段階としての特質を踏まえた上での「学びの基礎力」を育てる手立てを工夫し充実させていくことが望まれる。

3 「学びの基礎力」の学校間の格差

図表2-3-5は、「学びの基礎力」のいくつかの項目について、子どもの自己評価の最も高い学校と最も低い学校とを対比させて見たものである（項目によって該当する学校は異なる）。また、図表2-3-6は、「学びの基礎力」の16のカテゴリーについて、最もスコアの高い学校と最もスコアの低い学校の範囲を全体平均と併せて示し、全体としてのバラツキの範囲を表したものである。

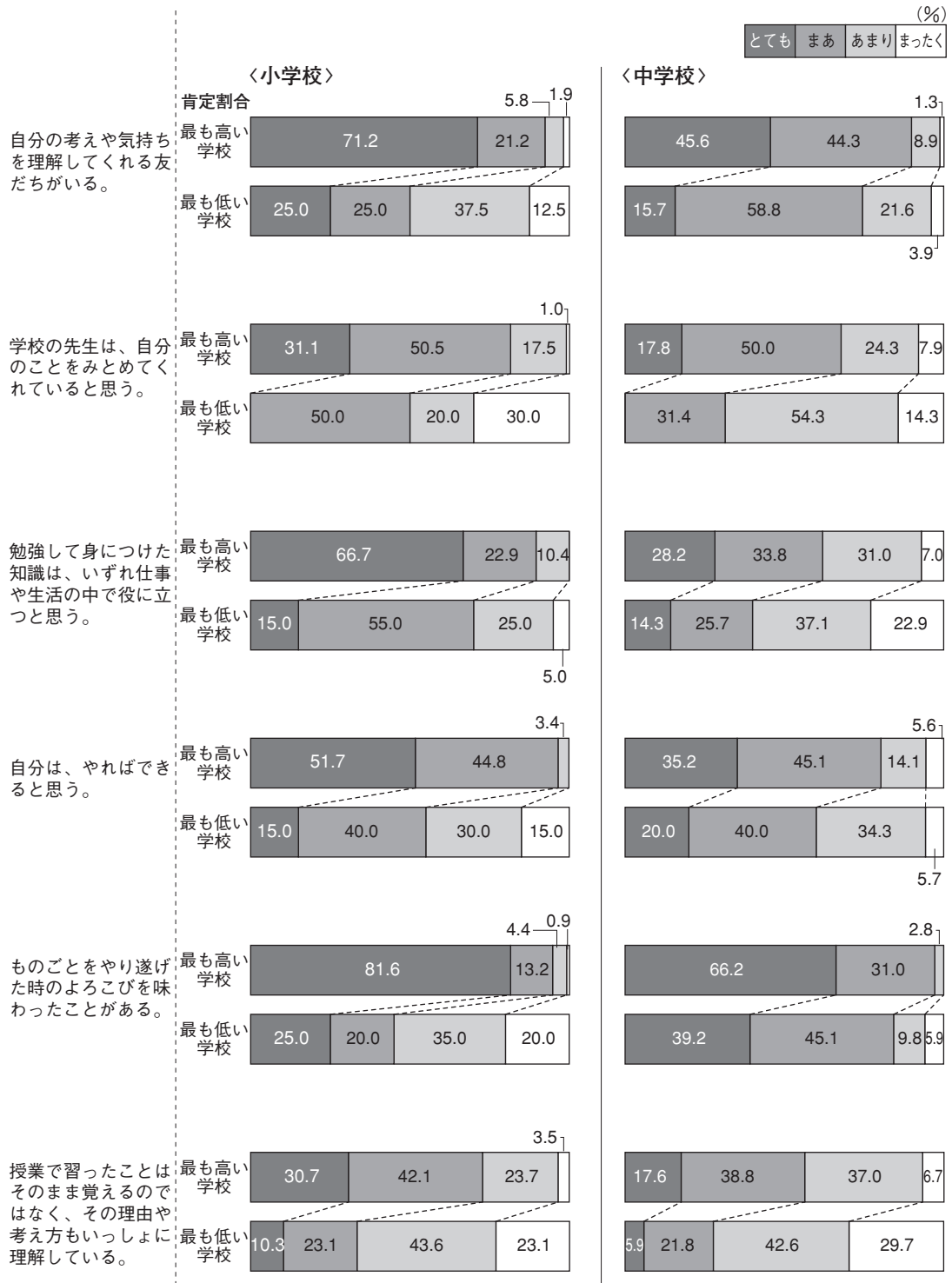
図表2-3-5で、例えば「勉強して身に付けた知識は、いずれ仕事や生活の中で役立つと思う」という項目について、小学校と中学校の自己評価の最も高い学校と最も低い学校で、ト

ップボックスの数値についてみると、小学校では、67%と15%、中学校では、28%と14%となっており、大きな格差があることがわかる。

「学びの基礎力」の各項目についての自己評価の状況を学校ごとにみると、このようにほとんどの項目で学校による大きなバラツキが見られるのである。

学校によるこの格差には、家庭や地域の学習環境の地域的な違いが、程度の多少はあれ、反映されていると考えられる。しかし、学校内部の取り組みによる違いそのものによるところも大きいと考えられるのである。

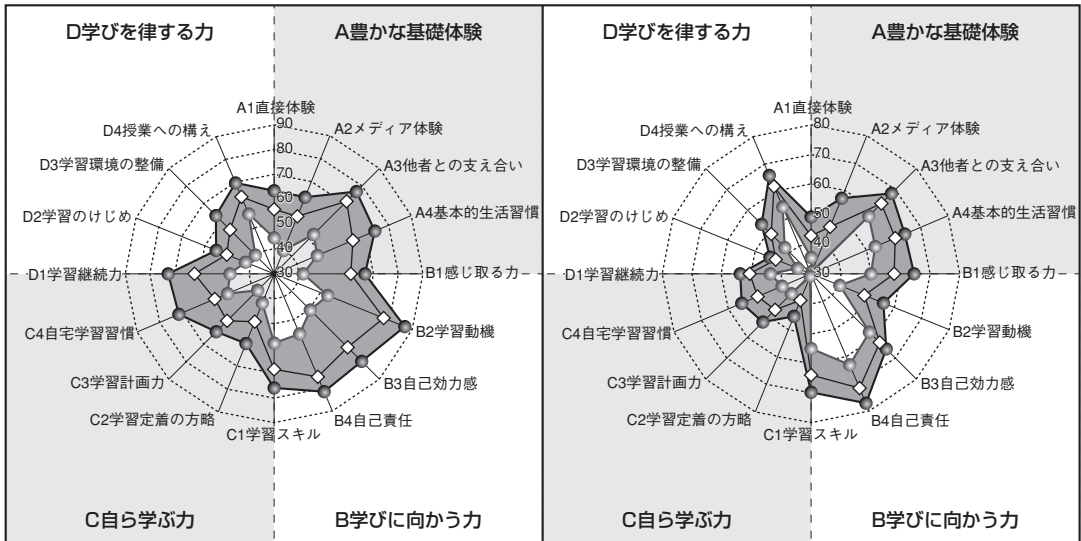
■図表 2-3-5 「学びの基礎力」の学校間の格差(個別項目の例)



■図表 2-3-6 「学びの基礎力」の16のカテゴリー別スコアの分布範囲

〈小学校〉

〈中学校〉



—◇— 全体平均 —●— 最も高い学校 —■— 最も低い学校 —◇— 全体平均 —●— 最も高い学校 —■— 最も低い学校

※「学びの基礎力」の16のカテゴリーごとに、設問の回答を0から100までの間で得点化し、学校間でのバラツキの範囲を示したものを。

おわりに

以上、「学びの基礎力」の子どもによる自己評価の結果と、その小5生と中2生の対比、また、学校間の違いを見てきた。「学びの基礎力」は、教科の学力や「生きる力」を形成するベースとなる力であるが、第1章で述べられているように、これらの3つは相互作用を通して、お互いに高め合うという関係にあるものであり、まず「学びの基礎力」を付けることを優先しなければと

というような段階論を持ち込むことは必ずしも適切ではないだろう。

これからの指導の改善に向けて学校全体として取り組む必要があるとすれば、それは、子どもたちや学校をめぐる実情を多面的に把握し、学校としての重点課題がどこにあるのかをよく見定めるといことではないだろうか。

本書の内容で、間違って記載された箇所がございました。読者の皆様にご迷惑をお掛けしたことを深くお詫びし、訂正させていただきます。正誤表を以下に記載いたしますのでご参照ください。

【 正 誤 表 】

P 5 7 第 2 章「学力向上のための基本調査」の設計と結果概要

2 - 3 「学びの基礎力」の自己評価の現状

(4) 「D . 学びを律する力」(自己コントロール力) に関する回答結果

6 行目 及び 9 行目

誤 「授業授業への構え」 正 「授業への構え」